

## 彼女たちの受難——表象としての〈女の学問〉——

菅 聡 子

「女はすべて文盲なるをよしとす……別して学問などはいらぬもの」(松平定信、1782)

「御茶の水の蝦茶式部の御茶つぱい」(『読売新聞』1902. 2. 5)

女子教育は、その歩みを始めた明治初年以來、現在にいたるまで、時代の価値観の変容に伴って、さまざまな困難を強いられてきた。そのさまは、教育史等における具体的な事象のみならず、文学の領野においてもさまざまに読み取ることができる。〈学問〉は本来男性の領域とされていただけに、そこへの女性の進出は反発を招かずにはいなかった。本稿においては、明治二十年代の小説作品を主な対象として、女子教育・女性の学問がどのような表象として表現構造のなかに組み込まれているのかを見てみたい。その分析を通して、明治期におけるジェンダー規制を考える一助とすることが本稿の目的である。

### 1.



出典：『お茶の水女子大学百年史』  
(1984年)

左の図は、豊原国周<sup>1</sup>による『当世開花別品競』の「女子師範学校」(版元三宅半四郎)である。画面には「豊原国周筆」ならびに「明治二十年」の文字が見える。ただし、ここで描かれた女子師範学校生の服装は、「紺色と浅黄色との立縞木綿袴(平袴形)を穿かせられ(官給)上衣は通常のものであつた」、また頭髪は「唐人髷」という明治八(1875)年の東京女子師範学校開校当時のものと一致しており<sup>2</sup>、また作品に冠せられた「開花」(開化)の文字をも考え合わせると、明治初年代の女子師範学校生——実質的には東京女子師範学校生——の姿を描いたものと考えるのが妥当であろう<sup>3</sup>。

この錦絵を所有する樋口弘氏は、『幕末明治の浮世絵集成』(1955)において、この図をも含めた国周・周延らの一連の開化錦絵について「あの国周や、周延や、幾英などの描く、女教師、女学生、女官、女演説家などの顔や、態度の如何に明るい姿で、理知的なものとして描かれていることよ。こゝにも女権の伸長が社会の各層に受入れられ、浸潤しているかを証明するものである」(p. 40)という解説を加えている。しかしながら、この絵の構図には、「明るい姿」「理知的」とのみとらえるには不自然なものが描かれている。それは、画面右下に描かれたみすばらしい黒犬の姿であ

る。女子師範学校生と黒犬の視線はぶつかっており、かつ彼女が腰に下げた「学校」の札と黒犬の首輪に下げられた札とは対応している。そして左側には、「女子師範学校」の大看板。この構図は、「別品競」のタイトルのもとに、明治近代の一つの象徴としての女子師範学校生、すなわち〈学問する女性〉の風俗を描いてはいるが、女子教育についての同時代の人々の認識を解読コードとして導入した場合には、別の意味が浮上してくる。それは、女子の学問、(高等)教育に対する世間の揶揄のまなざしである。言い換えれば、女子師範学校生とみすぼらしい黒犬の視線をぶつかり合わせたこの構図は、その結果、両者の存在を平行なものとして提示し、学問する女性の姿を暗に諷しているわけである。平木浮世絵美術館によれば、この国周の『当世開花別品競』は当該の一枚しか存在しておらず、よって他の絵柄を参照して全体の意図を比較することはできない。描き手である国周の画意を検証することも現時点では不可能である。しかしながら、画面左側に大書された「女子師範学校」の文字は、そのような意味を誘発する一つの記号として機能せずにはいないのである。そしてそれは、同時代の女子教育・女性の学問の置かれた状況を象徴するものであった。

明治五(1872)年の学制頒布をもって明治日本における近代教育はその歩みを始める。その際、注目すべきは、「被仰出書」(学制序文)において「幼童ノ子弟ハ男女ノ別ナク小学ニ従事セシ」むべきことが明言されたことである。この思想は学制頒布に先立ち太政官が出した「後来ノ目的ヲ期シ当今着手ノ順序ヲ立ル如左」においても、「一 一般ノ女子男子ト均シク教育ヲ被ラシムヘキ事」と示されていた。女性にとって学問や余分な教養は不要なものである、とされた伝統的な女性観に比して、ここで示された「男女ノ別ナク」という思想が、女子教育の展開を追う上で重要な意義を持つことは言うまでもない。もちろん周知のように、明治日本における女子教育は、東京女子師範学校開校式での祝詞における中村正直の「後来茲に在て学習卒業するもの善き婦人となりて夫を輔け善き母となり児女の教師となり善種の人民を生育して我国をして福祉安寧の邦たらしめんことを」、あるいは田中不二麿の「女子は教育の母なり」<sup>5</sup>という言葉に明らかなように、もともとの志向として「賢母」の養成を前提としており、明治三十年代に至るまでに「良妻賢母主義」の色彩を鮮明にする<sup>6</sup>。さらに、男女の別なく等しく与えられる教育の機会、「必ス邑ニ不学ノ戸ナク家ニ不学ノ人ナカラシメン事」という発想が、一方で均一な〈国民〉の生成を意図していることは明らかであろう。だがそれらを考慮した上でもなお、女性に学問・教育の可能性が開かれたことは、現代にいたる女性解放の第一歩として特記されるべきである。

女子教育は決して平坦な道を行んだわけではない。学制頒布以前から、ミス・キダーの塾(のちのフェリス学院)、B六番女学校(のちの女子学院)等のキリスト教系の女学校が設立され、女子教育の第一歩は、主にキリスト教伝道者をその指導者としてすでに踏み出されていた。最初の官立の女学校は明治五年創立の竹橋女学校であるが、同八年に東京女子師範学校が設立されるとともに、同十年廃校となり、在學生の一部は同校の英語科に吸収される。竹橋女学校の廃校にともない、女子師範学校への移動を余儀なくされた鳩山春子は、両校を比較して次のように述べている。

竹橋女学校と師範学校とは生徒の種類が全く異つてゐます。前者の方は、当時の元老議官とか、其他高位高官又は紳商などの令嬢等が多いものですから如何にも悠暢に出来てゐます。それで月謝も高ければ、生徒の取扱ひも良いと云ふ風です。服装は一般に華美で、何処までも姫様の出来上つて居ると云ふ有様でした。(中略)之に反して師範学校の方では全然入學者の気分が異ひ、服装からして第一質素であります。そして多数の人は此處を卒業すれば各地へ先生となつて赴任

して行く積りでしたらう。尤もこの時分は現在の如く卒業後何年教師をせよと云ふ様な制限は更になく、各自の随意でして、直に嫁入して少しも教職に就かずとも宜いのでありましたが、大部分は志を立て、学問に従事した人々でありましたから、どうしたつて緊張した気分を持つてゐます。兎に角余程確乎した人の揃つたものでありました。(鳩山春子 1929, pp. 59-60)

ここでの鳩山の回想は、東京女子師範学校生に付与されていた、かつ、その後も受容されていくことになるある種のイメージを語っている。また時代はくだるが、青山なを『安井てつ伝』(1929)は、明治十二年の「女高師の第一回卒業生達」への視線を、「当時女高師の卒業生といへば偉いものであつた。生徒達の好奇心と期待の中に、ずらりと洋服姿の新卒業生達が並んだのであつた」(p. 34)と、卒業後、授業参観に来た彼女たちについての羽仁もと子の回想を通して伝えている。さらに、唐澤富太郎『女学生の歴史』(1979)が「女高師卒というと、一目も二目もおいて、畏怖した男教員も多かった」(p. 43)と述べるように、その勉強ぶり、「官立」というお墨付きに加えて、開校時以来の「男袴」を身につけたその外貌というイメージは、同時代の人々に畏敬の念を起こさせもしたであろう。徳富蘆花『富士』(1925-28)が明治二十七(1894)年当時のこととして、主人公熊二が結婚相手として「お茶の水女子高等師範の三年生」を打診された際に、本人に会う以前から「其様な立派な女ひとなら、私には不向きです」と答えるさまを描いているのは、明治初年代以来の「女子師範学校生」観がそのまま継続していることを示していよう。しかし同時に、彼女たちに向けられた視線は嘲り・揶揄に満ちたものでもあった。〈学問〉という領域への女性の進出は、男性にとっては自らの領域への侵犯である。宮城栄昌・大井ミノブ・山田武麿・福地重孝『新稿日本女性史』(1974)によれば、女子師範学校創立当時、「女が師範学校にはいって学問するのは、容貌が悪いが、経済的に貧困であるか、何かの欠陥がある女性のように考えられ、師範学校に入学することを出家でもするように思われ『女子師範さて縁遠い顔ばかり』(唐変木)と皮肉られた」(p. 210)。もちろん、事は東京のみならず他県の女子師範学校全般に及んでいる。唐澤前出書は「『どんな貧乏をしても、娘を師範に入れない』と頑張った母親や、『容貌が見にくいから師範に入れ』と勧められた娘」(pp. 44-45)といった千葉女子師範学校や熊本女子師範学校の事例を多く紹介している。そして、ここで着目しておきたいのは、そのような嘲り・揶揄が、一定の方向性をもっているという点である。

男性領域への侵犯に対する攻撃は、当然のことながら侵犯者の〈性〉を焦点化する方向性を持つ。それが最も明瞭にあらわれたのは、明治三十年代におけるいわゆる女学生バッシングであろう。その際、活字メディアに氾濫したのは、女学生の〈墮落〉をめぐる言説であった。もっとも、男子書生の〈墮落〉の問題も早くから新聞紙面を賑わしていたが、〈墮落〉の具体的な内容には性差がある。男子学生の場合、性的放縦(吉原での女郎買いなど)に加えて、賭事・借金・飲酒、あげくの果ての強盗と、その内容は多岐にわたる<sup>8</sup>。だが女学生の〈墮落〉は、性的墮落一辺倒である。その流行にのって、明治期におけるベストセラー小説の一つとなったのが、小杉天外「魔風恋風」(1903)であった<sup>9</sup>。〈魔風恋風〉というタイトルが明示しているように、ヒロイン萩原初野の行く末に〈墮落〉が用意されていることは、同時代の読者にとっては自明のことであった。よって、読者は最初から初野という才色兼備の女学生、学問による立身出世を願い、ひたすら勉学に励もうとする女学生の墮落を期待の地平として作品を読みすすめることになる。そして同時に、初野の学問のもたらした可能性—妾の子として蔑まれる彼女が、学問による立身出世をとげ、現戸主である義理の兄の権威を多少なりとも動揺させる、という—は、作

品言説の内部で巧妙に隠蔽されていくのである。一方に高等女学校令（1899）並びに女子教育の良妻賢母主義一本化を配置したとき、この女子の学問の可能性の隠蔽が、決してテキスト上の語りの戦略にとどまるものでないことは明らかであろう。

ではさかのぼって、それ以前においてはどうか。女子の学問は、何を表象し、どのような表現構造の中に組み込まれていたのだろうか。第2章以降においては、明治二十（1888）年前後の、主に男性執筆者による小説を数編とりあげ、述べたところの問題について考えてみたい。ここで明治二十年代に考察を集中するのは、一つには当該年代が日本における近代国家成立の根幹を形成した時期にあたり、それに伴ってジェンダー規制がより強化され始める年代だからである。同時に、メディアによる女子教育への攻撃が、最初に集中して現れたのもこの時期であった。これは、村上信彦『明治女性史 中』（1974）や、小関三平「明治の『生意気娘』たち（中）」が指摘するように、墮落した女性教師をあつかった嵯峨野やおむろ「くされ玉子」（1889）や、須藤南翠「濁世」（1889）といった小説テキストの登場と呼応している。一方では、加藤弘之らによって「女子高等教育無用論」が展開されてもいた。『読売新聞』が、〈女学生の醜聞〉についての記事を集中的に掲載し始めるのも、明治二十二年から三年にかけてのことであった。たとえば国木田独歩は、「感ずる処を記して明治二十二年を送る」で、「教育界を暴らしたる、彼の女学生に対する醜聞は、其の風説にしる虚報にしる、以来女学生貴婦人の行為挙動に、壮嚴肅整を帯びしめしや明なり」（p. 504）と述べている。すなわち、二十年代の女子教育をめぐる時代の視線は、初年代から十年代までの比較的開明的傾向から、否定的側面へその重心を移しつつあったのである。そのような傾向は、当然小説テキストにも如実に現れる。

明治十年代の政治小説においては、女子の学問・教育、またはそれへの希求は、政治への関心を「才子」と分かち合うに足る「佳人」あるいは妻であるための積極的な要件であった。しかしながら、政治小説が後退する二十年代以降は、政治参画という視点からの女子の学問への要請は、少なくとも小説においては、ほとんどその影を潜める。それと入れ替わるように、二葉亭四迷の『浮雲』以来、小説テキストは、女子の学問・女子教育に対して、微妙な色合いを帯びた言説を展開するようになる。

また視線を転じれば、明治二十年代は、中島湘煙・清水紫琴・田辺花圃・木村曙・樋口一葉ら、多くの女性作家を輩出した時代であった。ここで主に男性作家の作品をとりあげるのは、一つには前述した女性作家のほとんどは、樋口一葉を除いて、自らが女学校に通い、先端の女子教育の恩恵を蒙った経験を持っているからである。おのずから女子教育に向けられるテキスト内の視線も、女子教育の内部からのそれという色彩を帯びざるを得ないであろう。たとえば、当時の女学生や、彼女たちをとりまく状況を描いたという点では、まず田辺花圃『藪の鶯』（1888）や木村曙『婦女の鑑』（1889）が想起されるが、本稿においては上記の理由によりとりあげない。加えて、男性領域への侵犯である女子の学問への評価は、それゆえにジェンダーによる差異をより鮮明に浮上させる傾向を持つ。よって、男性作家によるテキストには、女子の学問への否定的色彩、あるいはそれから排除された者の視線がより濃厚に現れることが予想されるのである。

以下、女子教育・女子の学問をめぐる言説について、とくに現実のレベルで云々されることが多かった結婚（離婚）とのかかわりにおいて、小説テキストがどのような文脈を形成していたのか、見てみたい。

## 2.

政治小説という枠組みの中では、新時代の教育を受けていることは、主人公である男性とともに政治に参画するための、あるいは彼の政治活動を助けるための、新しい妻の要件であった。末広鉄腸『雪中梅』(1886)のヒロイン富永春は、冒頭から「書物が好きで、トウへ女教師までに成つた」女性として登場し、自ら「私しも此の先洋学がして見たいと思ひますから、御母さんに万一のことがありました時にハ、内の事ハ叔父さんにお頼み申して置まして、私しハ何処かの女学校で勉強しやうと思ひます」と希望を述べる。政治上のことに關しても、「此世の中で男子を助け、欧米諸国と肩を比べる様にするにハ、女にても少しハ政事上のことを知らねバ成らぬと思ひ」、「演説会」の傍聴にも出向いている。弁護士川岸が彼女を妻にしたがるのも、親の遺産があるのに加えて、「夫の女ハ風俗も卑しくなく、教育があつて英学も相応に出来ると云ふから、妻にしても不都合ハあるまい」と考えるからである。また、主人公国野基が、お春との交際について、「實際ハ学問上の交際を結バふでハ御坐いませんか」と提案するように、このテキスト中では、女子の教育・学問への情熱は、「男子を助け、欧米諸国と肩を比べる様にする」ために必要とされる、新時代を担う男性の妻の条件なのである。

しかし一方、教育・学問といった新しい価値基準は、排除の力学を伴う。たとえば北田薄氷「鬼千疋」(1895)においては、お秋は、夫の妹、すなわち「小姑」富子によって、「此方は外国語を習ひたるか」「さりとは今の世に話せぬ人かな」という言葉をもって蔑まれる。日々、富子とその口車にのせられた姑による精神的虐待はひどくなるが、没落士族である父母から、「女大学」に従った教育を受けてきたお秋は、姑や富子にあらがうすべを持たない。もちろん、お秋も「女大学」流の教えに疑問を抱かなかつたわけではない。嫁入りを前に、「女は三界に家なし」と「女大学女今川」を繰り返す両親の訓話を聞きながら、彼女は「女の道は慙くまで重きものか」「さても女とはあさましきものなり」という漠然とした疑念を抱く。しかしそれは、明確な論理として形成されることはない。

夫松宮寛治は、「海軍大尉」で、「言語越ものいひごしの優しさは赤兒も懐くべき相好。いつも愉快相なる顔して面白く語り声高に笑ひ、何事にも頓着せぬ性質」という人物である。よって、彼自身によって、お秋が新時代の教育を受けていないことが云々されることはない。富子が療養先から突然帰宅するまでは、夫婦の関係は至極うまくいっていたのである。お秋は、富子の言う「我兄は見らるゝ如き無頓着なるお方なれば、活発なる女を好みて気の小さく陰気らしきを痛く嫌ひ給へば、此方もよくへ心すべき事なり」という言葉をきっかけに、夫の前で無理に「活発」を装うようになり、二人の関係には違和感が生じる。作品の末尾では、寛治が「清国の沿海へ航海」に出ている間に、姑と富子からさらにひどい仕打ちを受け絶望したお秋が、庭の井戸に身を投げたことが暗示されている。確かに、お秋の悲劇の触媒となったのは富子である。しかしながら、お秋はその言葉をそのままに受容し、自らを束縛していく。「海軍大尉」たる夫につりあう妻は、新時代の教育を受け「英学」に堪能な女性でなければならない、という図式が、お秋には自明のこととして受け取られていたのである。そのため、お秋は自分の真の言葉を夫に対して発することを自ら封じてしまう。実際のところ、この作品の悲劇の原因はお秋自身の内部にあるのであって、教育の有無は別の次元の話である。だが、そのテキストを構成する要素の一つとして、新時代の教育を欠く者への軽蔑・排除の視線が、「学問好きなれば駿河台の女学校に通うて居た」富子の形をとって具象化されていることは注目にあたいする。

樋口一葉「十三夜」もまた、教育のないことを嘆く妻の姿を描いていた。「十三夜」の今宵、離婚を

願い出るため実家の両親に向き合い、お関は、「二言目には教育の無い身、教育の無い身と御蔑みなさる」と夫原田勇による精神的虐待の一端を語る。「奏任官」として活躍し、かつ「やかましい舅姑」のいない夫婦と長男太郎の核家族を形成する勇自身は、おそらく新時代の教育を受け、それゆえのエリートコースを順調に歩んでいるものと思われる。お関は「それは素より華族女学校の椅子にかゝつて育つた物ではないに相違なく、御同僚の奥様がたの様にお花のお茶の、歌の画のと習ひ立てた事もなければ其御話の御相手は出来ませぬけれど、出来ずは人知れず習はせて下すつても済むべき筈」と勇への不満を口にするが、「お花のお茶の、歌の画の」が、勇の言う「教育」と同義のものだとはとうてい思われない。勇がイメージしているのは、新時代の女子教育に他ならない。お関が伝える勇の妻への不満は、「一筋につまらぬくだらぬ、解らぬ奴、とても相談の相手にはならぬ」ことであり、またお関が「いつでも御詞に異背せず唯々<sup>はいはい</sup>と御小言を聞いております」と、「張も意気地もない愚うたらぬの奴、それからして気にいらぬ」と言うのだから、勇がお関の「女大学」流のふるまいに不快を感じていることは明らかである。すなわち、勇が求めているのは新時代の女子教育を受けた良妻賢母なのであり、「教育」をキーワードにした二人の認識には大きなずれがある。そして二人は、ともにこのずれの存在には気づいていない。

もともと、「御身分がらにも釣合ひませぬし此方はまだ根つからの子供で何も稽古事も仕込んで置ませず、支度とても唯今の有様で御座いますから」と幾度も断る両親に、「我が欲しくて我が貰ふに身分も何も言ふ事はない、稽古は引取つてからでも充分させられるからその心配も要らぬ事、とかくくれさへすれば大事にして置かうから」と「火のつく様に催促」したのは勇の方であった。それが、長男の太郎が生まれてからは、それまでの寵愛ぶりとは変わって、一転お関を上述のような言葉で責め始めた。つまり勇は、お関が母になったとたんに〈賢母〉の枠組みを導入し、その枠組みにおいてのみお関を認知しているのである。勇の前に一人の個人としてのお関は存在しない。女性をつねに、ある時は〈家庭の天使〉、ある時は〈ファミファタル〉、そしてある時は〈良妻賢母〉……と、つねに何らかの記号をもって表象され、個としての内実を消去されて認知されてきたが、ここにもその一例を見出すことができるだろう。

新しい時代の妻の要件として教育・学問が認知されれば、必然的にその欠如は離婚の要件となる。離婚を望む男性側にとって、教育の欠如は、「女大学」流の「七去」とは異なる新しい「妻を去る」理由として、利用価値の高いものであった。

「鬼千疋」のお秋、「十三夜」のお関はともに、新時代の教育は受けていなかったが美貌の妻たちであった。二人が「氏なくして玉の輿」を体現し得たのもそれゆえであった。だが、この妻たちの範疇からさらに排除されているのは、尾崎紅葉『袖時雨』（1894、1891の新聞連載時の題名は『焼つぎ茶碗』）のお敏である。現在、お敏は「理学士」合川理輔の妻である。二人は「従弟同士、五歳の年より許嫁の頃は睦まじく遊び暮らして」いたが、お敏の実家の援助で理輔は十五歳のとき東京に「御遊学」、そして十二年の間別れて暮らし、「去年かく世帯持つ」にいたった。だがお敏がひそかに「田舎育ちの此身などにお心のなき事」と危惧していたように、「添ひは添うても夫婦とは名ばかり」、理輔はお敏を邪見にあつかうばかりである。

もっとも、このような例は当時珍しかったわけではない。『家庭雑誌』（1894・3）の「社説」には、次のような叙述が見られる。

古は糟糠の妻、堂より下さずと云へり、然るに今日に於いて、少しく夫婿が立身すれば、たちまち旧妻を離婚するものあり、而して夫婿の立身なるもの、往々妻家の助力によりて出で来りけるに係わらず、無情にも一朝罪なくして離婚するものあり。現に妻家より学資を得て洋行し、洋行後、官吏となり、而して其の妻君を離婚したるもの、一二にして足らず。自ら怪しまざるのみならず、世の人も之を怪しまず、斯くして一家治まると云ふ可きか。

妻の実家の援助によって学問を修め、出世を遂げた夫が、その暁には妻を離縁してしまうという事態は、もちろん妻の実家が現在においても力を維持しているかどうか等の個別差はあるが、その根本にはやはり、いったん男性が戸主の座についてしまえば、財産権その他を掌握することができるという、明治期の家父長制度の問題がある。お敏の場合、養子縁組ではないようだが、すでに実家の両親は死亡しており、よって「家は断絶<sup>たえ</sup>て」、離婚されてしまえば行きどころはない。

理輔のお敏に対する最大の不満は、その「不器量」にある（と少なくともお敏は考えている）。お敏に忠実な下女お力が、彼女を慰めようと「近い例」として「痘痕面の上に赤毛の縮れ毛、しかも薄いことは蜀黍の頭ほどにて、旦那様といへば男も顧視<sup>かりわく</sup>ほどの美男子<sup>よいをとこ</sup>。お子様がお三人まで出来て、日曜毎に（中略）車を並べての御遊山。人は美貌<sup>みづめ</sup>よりとて」と、「安藤様の奥様」を引き合いに出すと、お敏は「なるほど安藤の奥様は、あの通りの不器量なれど、其代りには英学、漢学、和歌やら抹茶やら、何一つ欠けたる所なき御方なれば、其にて旦那様も満足なさるゝなるべし。及びもなき此身の無学無芸、実もならざれば花もなき野末の草に、情の露はかゝらぬ道理」と嘆く。ここでは女子の教育・学問は、その醜貌を補うものとしてとらえられている。教育・学問は本来、人間の内面形成にかかわるものだが<sup>10</sup>、女子の教育・学問をとりまく明治期の言説は、それを一目瞭然の可視的な要素、すなわち女性の容貌と直結させることで、女子の学問・教育が同時に嘲笑の意味を喚起しうる文脈を形成しているのである。

そう言えば「鬼千疋」の富子がお秋につらくあたるのも、「人は見向かぬやうになれる二十五歳の今日までも、さる縁はあらざる」彼女が、自分よりも年若の美貌の義理の姉に嫉妬したからだと言っていた。富子の年齢、学歴、「縁はあらざる」という事実、お秋の年齢、美貌、と、それぞれはばらばらに導入されているこれらの要素は、時代のコンテクストによって統合されれば、上記のような意味を生成せざるを得ないようになっている。ちなみに、女子師範学校・醜貌・嫁き遅れという三つを組み合わせた山田美妙『嫁入り支度に 教師三昧』（1890）は、その結果の選択としての「女教師」という図式を明示する。このテキストは、「女教師」をとりまく視線に潜在する嘲笑を前景化して見せている。

それにしても、理輔は本当にお敏の醜貌が不満なのだろうか。彼が彼女を嫌う理由は、その一点につきるのであろうか。恐らくそうではない。「世間は広し、しつくりとしたる相性の男」がいるはずだ、「我一人ばかりが男かは」という理輔の言葉には、もちろん彼のエゴが透けて見えるが、しかし一面の真実でもある。男女の関係性は外的条件によって決定されるばかりのものではない。理輔はとにかくお敏が「心に染まぬ」のである。どんなに彼の理性が、罪のないお敏に対する自分の仕打ちの酷さ・理不尽さ、彼女の両親への不義理、お敏の哀れさを認識していようとも、その存在を実際に感じたときにわき起こる嫌悪感は、理屈では説明のつかない、生理的なものなのである。その名前のうちに「合理」を隠し持つ「理学士」合川理輔は、しかし合理の及ばぬ感情の具象として登場している。だが言説のうえでは、女子の学問と容貌という記号が自ずから一つの文脈を形づくり、お敏を狂気に追いやる。そして何より、「鬼千疋」のお秋がそうであったように、このような文脈を内面化しているのは、お敏自身な

のである。

ここに女子の学問・教育をめぐる小説テキストの表現構造における一典型を見ることができる。女子の学問・教育に対する不信のみならず、「教育」と「醜貌」といった記号の連繋がおのずから形成する一つの文脈も、その多くは女性自身によって語られるのである。次章では、その例として坪内逍遙「細君」と泉鏡花「X蠅螂鯨鉄道」をとりあげ、上記のような表現構造の一端を、とくに女性同士の関係性に着目しつつ論じる。

### 3.

清水紫琴は「当今女学生の覚悟如何」において、「当今我が国の女学生幾万、而して其中将来の改革者を以つて自ら任じ、他日の先導者を以つて自ら期するもの幾人かある」と、女学生たちに対して警鐘を鳴らしている（p. 364）。この評論で紫琴が前景化しているのは、「多くの望みと喜びに充されて、花々敷く世の中に乗出さんとする諸嬢を、真に清き愛と実に潔き心とを以つて、歓迎し、能く諸嬢を満足せしめ得べき男子、今何処にかある、諸嬢が学校に於て学び脳裏に於て画きつゝある家政の採り方育児法などを賞美し喜んで之れを納れ之れを行はしむべき、改進黨の舅姑今何処にかある」、すなわち学校の内と、外の世界との間の大きな認識のギャップである。「女学生として結婚したるもの」「女学生の細君たりしもの」が直面する困難は、学窓において彼女たちが想像する範囲を大きくこえている。かつ、彼女たちは「生中、高尚なる理想と善美なる、志望とを抱くを以つて、昔時の婦人よりは、其の困難を感ずること一層切なるのである（p. 365）。ゆえに紫琴は強く訴えている。

諸嬢の前途や実に遼遠、而して日本今日の状態たる実に困難、家裡に於ても、改むべきもの、変ふべきもの一二にして止まらず。況んや二千万姉妹と二千万兄弟との間に於ける関係をや。而して之れを改め之れを実行するの責に当るべきもの、女学生諸嬢を措きて夫れ誰ぞや。予が諸嬢に、其覚悟如何を問ふものは、豈待つ所なくして然らんや。幸に重く自ら任じ深く自ら信ずる所あらんことを（p. 367）。

紫琴がこの文章を掲載した前号、三美郷人の寄書「女子の分際を以て学問する事かはある」は、「議員たる某君」の言葉として「妻として持つべからざるものは女学校出の婦人なり吾が県の如きは殆ど皆女学生を嫌忌するのみならず女学生自身も大に恥るところあつて今は却て身の学窓にありし事を掩ひ隠すに至るこそ道理なれ」「女子はおのづから衣を縫ひ食を理するの職ある者を猶あきたらず思ふにや」を伝えていた（p. 339）。紫琴の文章は、第1章でふれたようなこの時期の女学生への攻撃に抗して書かれたものと考えられるが、実際のところ、女学校から外部の世界へと出、結婚生活に入った元女学生は、学問・教育とは別の評価軸において批判にさらされねばならなかった。

坪内逍遙「細君」（1989）は、元女学生の妻を主人公としている。従来この作は、逍遙自身の結婚の事情に焦点化されて述べられるか、あるいは逍遙の小説放棄の作として紹介されるか、いずれかの傾向にあった。しかし、前出の紫琴の評論を傍らに置けば、この作は「女学生あがりの妻」という同時代のトピックスを、彼女の周りにはりめぐらされた視線の交差によって描き出したものであると言える。

下河辺定夫の妻お種は、「素と相応な官員の娘にて、師範学校をも卒業せし」女性である。定夫は「才子、学者、洋行済、日の出の官吏、評判よき著述家などいふ資格にて、世間に名の聞えし紳士」だ



が、浮気者でそれゆえの借金も多く、「今も毛色の変つた困ひもの<sup>ある</sup>が有」らしい。タイトルの「細君」からすれば、当然焦点化されてくるのはお種であると予想されるし、実際、語りのほとんどはお種をめぐるものなのだが、語りの展開の中で読者に鮮明に印象づけられるのは、小間使いの少女お園の死である。ゆえに「『細君』を描こうとしながら小間使の悲劇になってしまった」<sup>11</sup>、すなわちお種の悲劇よりもお園の悲劇の方が前面に出るといふ構成の不均衡が指摘されることが多かった。実際、幼い時から苦勞を重ねて、しかし素直に誠実に働くお園は、語り手によって「品のない小さき天人」と呼ばれており、その彼女がお種に頼まれて質屋から金を借りて帰る道でひったくりに合い、お種への申し訳なから井戸へ身を投げる、という顛末は、あまりにやりきれない、救いのない印象を与える。

しかし、二人の悲劇は相互に関連している。単純な因果関係からすれば、お園の死は、そもそも巡査が言うように「子供に大金を持たして夜中に出すといふ」「不心得」が原因であり、それはまた自ら「車夫の妻の外に相談相手は無い事か。媒介<sup>なこうど</sup>の某氏が今も尚ほ生きてあらば、別に為様もあらうものを、只一個<sup>ひとり</sup>の相談相手も知る辺の中にないといふのは、味気ない身の上」と嘆いているように、お園以外にお種が相談の相手を持たなかったからである。このいきさつから浮上するのは、女性同士の関係性の中で、完全に孤立しているお種の姿である。

彼女は、周囲の女性たちによってさまざまに語られている。女学生時代、「負惜みの強いのと愛嬌の乏しい」ので知られていた彼女を、「『あの様な気前では嫁入りをしてからがどうでせう。何を言つても学問の外には取所のない人ですものを。』と器量自慢は密かに譏り、『教育の学問のと申しても、女の学問は知れたもの。学問で台所は出来ませぬ。生中ちツとばかり見識があると、高くとまるのが女の持前。権利だの同権だのと、菌の浮く事を言はれると、余ツ程の美人でも二度と見る気は出ぬものと、此間も宿のが言はれました』と意気な細君の聞こえよがし」。あるいは定夫が帰朝後、『漫遊日誌』を出版して話題になると、それと入れ替わりに「貌色」のさびれたお種を、「『浮けば見識が下り、物言へば風をひき、笑へば税が出るといふ貌。三世相が今出来ればあの人の写真を送つてやる』と先づ貌からして讒訴を發明し、八方へ触れ歩くは向う長屋の教員の細君。これも昔の友達」というありさまである。一方お園の朋輩お三は「女書生だから、台所の事は真暗で、いやに勘定の細かいくせに人を使ふ呼吸を知らず、目端が少しもきかぬ癖に、おつに世話を焼きたがる」と言う。またお種に借金を断られた継母お組は、他の借り口を求めて「従弟の家、姪の住居、こゝかしこと廻り歩」くが、結局「継女の噂をする」ばかりになってしまう。彼女の周りには彼女を語る女性たちの言葉の網がはりめぐらされている。

お種をめぐる噂はすべて同性の口から語られており、それらは何らかの形で彼女の「教育」「学問」、あるいは「女書生」あがりといったことに収斂するような文脈を形づくっている。だが一方、お種自身の言葉には、これらの記号に対応するような発言はまったく見られない。すなわち、人々は「女書生」「師範学校」出という記号を語っているのであって、誰も実際の彼女を語ってはいないのである。唯一お種が「師範学校」出にふさわしい言葉を発したらしいことがうかがわれる定夫との口論でも、彼女の言葉は「生意気に少し計り権利だとか財産だとか間違つた事を聴きかざつて自分の財産だと思ふだらうが……ナニ、そんな事は思はない。思はないものがなぜ黙つて、なぜ独断で抵当にし……、それだからおわびをする」「妻の権利がどうしたと。生意気な」と、定夫の長い独白に引用される形で伝えられるのみである。

逍遙は、『新磨 妹と背かゞみ』(1886)においても「師範学校をも卒業して。学芸拔群の誉」あるお

雪という女性を登場させていたが、彼女を評して、石橋忍月は以下のように述べている。

お雪は女子師範学校を卒業したる立派の淑女なり。結婚は生涯の大事たることを知りたるに相違なし。夫婦性質の合不合は畢生の苦楽禍福の境目たることを知りたるに相違なし。……苟も此の如き教育ある人にして斯程に利害の判然たるを知り乍ら自ら甘んじて否な忍んで其外を採るとハ叉手へ—奇妙の人物かな。忍は信ず苟も女子師範学校を卒業したる淑女方にして斯る一生の苦となり禍となることを排除するを知らざる人は之れ無しと。(石橋忍月「妹と背鏡を読む」、p. 156)

評の当否は別として、ここでもやはりお雪を規定しているのは「女子師範学校」という記号である。見られる存在としての女性は、その個としての内実ではなく、さまざまな記号によって規定されていくのである。

お種は、周囲の女性たちによって、「女学生あがりの妻」という枠組みで語られていた。だがその中であってお園だけは、最初抱いた「言葉少なで意地わるさう」というお種の印象を、優しい言葉をかけられたのをきっかけに「心の中に此やうな情け深いお人を、意地のわるさうなど思つたは、あれはきつと見ちがひであらう」と思い直し、「見直す心にて貌を上げ」、「夫人の顔をじつと見」る。口に出してわざわざお園の働きぶりを褒めることはしないが、「台所を擽がけにて働く婦人の情け」を彼女だけは知っていた。すなわち、記号でしかお種を語ろうとしなかった女性たちに対して、お園ただ一人が、本当の意味でお種を見ていた。その意味で、両者の間には、確かに何らかの絆が存在したと言えるだろう。だがそのことが、結果としてはお園の死を招いてしまう。「細君」はもともと他人に対して自分の妻を称する呼称であったが、テキスト中においては、すべて他人の妻をさす呼称として用いられている。お種は、周囲の女性たちにとって、「師範学校」出の「細君」、他人の妻としてしか存在しない。いわばお園の死は、女性同士の関係性から排除されていた「細君」の孤立によってもたらされていたのである。

女性同士の関係性が、「学問」をめぐる言葉によって、そこに潜在していた排除・差別の構造を顕在化するさまを描いたのは、泉鏡花『X蟻螂鯨鉄道』(1896)である。「学校では山科さんといふと上下響いたもの」だったが、現在は「土方や何ぞの妻」になっている山科品子と、在学中は品子に「お作文を直して戴いた」が、現在「秀蘭」という名を持つ女性作家となっている畠山須賀子の二人の会話によってテキストの大部分は展開する。その中心に位置するのは、その内容が空白のままにされている須賀子の小説「X」である。二人の会話にわずかに示された「X」についての言葉の断片によって、読者はこの空白を埋めねばならない。その過程で、品子の「学問」についての言及が、現在の二人の身分的懸隔を前景化していく。

市川祥子「泉鏡花『X蟻螂鯨鉄道』論——鉄道の意味するもの——」が指摘するように、「品子の現在の生活に突然介入してきた須賀子は彼女から言葉を引き出す」(p. 61)。よってここでも、「あんな学問なんかしなかつたら、<sup>ちつと</sup>些少は気楽に暮せませうのに、なまじつかの其が邪魔になつて、時々は堪らなく、キ、キと胸へ何だか込上げるの」「はい、邪魔になつて、邪魔になつて、邪魔になつて、邪魔で、邪魔で、私や何だつて、つまらない、学校へなんぞ行つたんでせう。邪魔で、邪魔でしやうがありません」という言葉は、女性自らによって吐かれることになる。

だが問題は、これらの言葉が、須賀子による「大層貴女かはりましたねえ」「あなたのお身体を旦那様のものとして、そしてまあ、かうやつて、お暮し遊ばして在らつしやれば、なるほど、学問を遊ばしたのが、お邪魔になるでございませう。源氏をお聞き遊ばしたのも、英文をお綴り遊ばすことも、書の

お見事なものも、仏蘭西のお出来なさいますものも、何んなにか、お邪魔になるでせう」といった、恐らくは無意識の、しかし巧みな誘導によって引き出されていることである。その結果、須賀子は品子の幼い息子に対する殺意まで発語させ、その子どもを奪い去っていく。遅れて登場する須賀子の弟千代太郎が、「軒よりも高きあたり、近衛士官の制服なる緋の洋袴の片足の豊に鞍にぞ跨りたる」構図は、品子に対する須賀子姉弟の優越性を具象化している。

「私のことを忘れないでまあ、よく書いて下さいました」「つまりいへば、貴女は、些とはものも知つてる女が、土方や何ぞの妻になつちやあ、気の毒だ、可哀相だ、つまらないと、いふやうにお思ひなすつて、可ござんすか。それで、この、Xもお書きなすつたやうなものですけれど」という品子の言葉、「あゝ、学校では山科さんといふと上下響いたものなのに、あんなにおなんなすつてから、何う遊ばして在らつしやるだらう、とね」、当時仲の悪かった友人たちが皆愉快に暮らしているのを見ると口惜しくて、「束ね髪の前垂がけて構ふものか。山科さんを引張り出して、日本橋の上へ立たしたら」、連中も小さくなるだろうと思うにつけ「つい、あんないたづら書もしました訳」という須賀子の言葉を総合すれば、「X」にはかつて優秀な女学生であった品子の落ちぶれた現在が、何らかの形で言語化されていると考えられる。この傲慢な行為を、無自覚なまま行っている須賀子の暴力性こそが、品子の潜在意識にあった、しかし未だ言語化されずにいた息子への殺意を、具体化してしまうのである。その身につけた「学問」に不釣り合いな品子の現状、という把握のしかたは、やはり「学問」という枠組みによって外部から現在の品子を規定する視線である。そしてここでは、二人によって共有されている「学問」は、それゆえに両者の現在の甚だしい懸隔を顕在化する記号として機能している。

\* \* \*

明治近代が新しく設定した教育の有無という価値観は、同時に新たな差別・排除の構造を形成する。服部撫松『教育小説 稚児桜』（1888）は、「貧しい者の子だからと云つて勉強次第でハ大学者にもなれないと云ふこともあるまいから何でも勉強が第一だ」と、貧窮の中で学問を修める少年直江清蔵を描き、結末に東京始審裁判所の検事となった彼の姿を用意して、まさに学制序文をそのままにテキスト化したような小説である。しかし、「男女の別ちなく均しく善良の教育を受けしむる」という均一な〈国民〉形成への志向は、「己等ハ建具屋なんざア厭やなこつた阿爺さんもおとつてネ建具屋にならなくつても好いから勉強をしろつて云つてるよ建具屋なんぞの様な職工人になつてネ何にも知らないネ下等人民だなんかと人に看縊られるからサ」という甚だしい職業差別の視線を生み出し、また一方では「斯る貧民の巢窟に入て実況を視察するも亦一の学問なり」「貴女の訪ひ来りしも偏に学問と云ふ無形の人の導きなれば仮令へいかなる艱苦に遭おふとも<sup>ゆめゆめ</sup>努々学問を怠るなよ」という「学問」の名の下に、実際には存在する階層差が隠蔽されていく。

本稿においては、不十分ながら、明治二十年代の小説テキストについて、女子教育・女子の学問をめぐる言説の一端を考察してきた。近代の制度において、女性はずねに名づけられ語られる存在として位置づけられてきたが、〈学問〉もまた、彼女たちを規定する一つの記号として機能し、その表象は個としての女性を隠蔽していく。とくに、女性自身の言葉によって〈学問〉を語らせるという表現構造は、同時代の視線・価値観を女性自らに内面化させる語りの戦略であると言えよう。そしてそれは、女性の〈国民化〉を考える上での一つの指標となるであろう。上述した差別・排除の構造は、女子教育・女子

の学問をめぐる言説では、さらにジェンダー規制を伴ってあらわれる。本稿においては、紙幅の関係もあり、明治二十三(1890)年の「教育勅語」発布を考慮に入れずに論を進めてきた。しかし、女性の〈国民化〉という視点からすれば、女子教育・女子の学問をめぐる言説に、「教育勅語」がどのような影響を与えているかは、重要な問題である。この点については、稿を改めて論じたいと思う。

(お茶の水女子大学文教育学部助教授)

## 注

1. 豊原国周(1835-1900)。江戸生まれの浮世絵師。役者大首絵で有名。
2. 『桜蔭会史』(桜蔭会、1940、p. 26)。なお、同書には、以下のような回想も掲載されている。

其頃用ひました袴は腰板、まち付きの思ひへのとは申せ、何れも細い男物と同じやうな縞物でした。(中略)髪は唐人髷と銀杏返し二種、髪飾は細い白葛引を結びました。(p. 24)

3. 明治十九年には「洋装」の指示が出ている。また、明治十八年より十九年までの名称は「東京師範学校女子部」、二十年から二十二年までは「高等師範学校女子部」である。
4. たとえば、五雲亭貞秀による横浜絵「横浜休日亜墨利加人遊行」に描かれた洋犬の洗練された姿と、この「黒犬」の姿とは対照的である。
5. 『東京女子高等師範学校六十年史』(東京女子高等師範学校、1934、p. 33)。
6. ただし、開校当初の賢母育成の理念は、のちの国家主義に基づく良妻賢母主義のそれとは一線を画するものであった。たとえば、山川菊栄『女二代の記』(日本評論新社、1956)は中村正直の賢母主義について次のように述べている。

なにかにつけイギリスの母親の知識や識見の高いことを知った先生は、日本の母親を省みて心をうたれるものがありました。日本へ帰ったら女子教育に力を入れなければ日本は危い、婦人が今のままでは日本は外国と競争できないと痛切に感じました。(中略)この時代に女子の文旨に反対して教育、とくに高等教育を与える意味の賢母良妻を主張したことは、明治中期以後の、女子の高等教育に反対する意味の賢母良妻主義ではなく、そこに封建時代の文旨主義を打破しようとする積極的な意味がふくまれていることを見なければなりません。(pp. 26-30)

7. なお、『桜蔭会史』(桜蔭会、1940、p. 26)によれば、「明治十二年一月頃から十五年十二月頃まで」の生徒の服装は「袴を廃止して通常の青年女子と異なることなからしめた」とある。
8. 土佐亨『『魔風恋風』考—受容・材源・テキストについてのノート—』(『文芸と思想』1975)における調査に詳しい。
9. 以下の分析については、拙稿『『魔風恋風』論—反不易流行小説の語るもの—』(『淵叢』1996)を参照されたい。
10. ちなみに、水原克敏『近代日本教員養成史研究—教育者精神主義の確立過程—』(風間書房、1990)によれば、帝国議会における高等師範学校廃止論に対して、女子高等師範学校関係者が示した「女子教育ニ対スル意見」(『東京茗溪雑誌』1891. 1. 26)は、「婦徳ノ養成」すなわち「人格形成を完全に遂行するのが女子高等師範学校である、これこそ女子高等師範学校の固有性であるという論理」(p. 868)を示している。
11. 石田忠彦『『細君』論—『真理』の行方—』(『近代文学論集』1983. 11、p. 7)

## 参考文献

- 青山なを『安井てつ伝』岩波書店、1929年。
- 石田忠彦『『細君』論—『真理』の行方—』『近代文学論集』9号(1983)。
- 石橋忍月「妹と背鏡を読む」『女学雑誌』47-49号(1888)。
- 泉鏡花「X 蟬螂鯨鉄道」『江湖文学』2号(1896)、3号(1897)、5号(1897)『鏡花全集 第三巻』岩波書店、1941年。
- 市川祥子「泉鏡花『X 蟬螂鯨鉄道』論—鉄道の意味するもの—」『群馬県立女子大学紀要』12号(1992)。
- 尾崎紅葉『袖時雨』駸々堂、1894年『紅葉全集 第四巻』岩波書店、1994年。

- 桜蔭会『桜蔭会史』(非売品)1940年。
- 唐澤富太郎『女学生の歴史』木耳社、1979年。
- 菅聡子『『魔風恋風』論—反不易流行小説の語るもの—』『淵叢』5号(1996):1-16。
- 北田薄氷「鬼千疋」(『文芸倶楽部』5編)博文館、1895年[『薄氷遺稿』春陽堂、1901年]。
- 国木田独歩「感ずる処を記して明治二十二年を送る」『女学雑誌』193号(1889):504-505。
- 小杉天外「魔風恋風」『読売新聞』1903.2.15-9.16[岩波文庫版『魔風恋風 前篇』『後篇』岩波書店、1951年]。
- 小関三平「明治の『生意気娘』たち(中)」『女性学評論』10号(1996):121-151。
- 嵯峨野やおむろ「くされ玉子」(『都の花』9号、金港堂、1889)
- 三美郷人「女子の分際を以て学問する事かはある」『女学雑誌』238号(1890):339-340。
- 清水紫琴「当今女学生の覚悟如何」『女学雑誌』239号(1890):314-367。
- 須藤南翠「濁世」『改進黨新聞』(1889.4-5、当該号欠号のため詳細は不明)
- 末広鉄腸『雪中梅』博文堂、1886年[『明治文学全集6』筑摩書房、1967年]。
- 坪内逍遙「細君」(『国民之友』37号附録)民友社、1989年[『現代日本文学全集1』筑摩書房、1956年]。
- 。『新磨 妹と背かゞみ』会心書屋、1885-86年[『明治文学全集16』筑摩書房、1969年]。
- 東京女子高等師範学校『東京女子高等師範学校六十年史』(非売品)1934年。
- 徳富蘆花『富士』福永書店、1925-28年[『蘆花全集』16-18巻、新潮社、1929-30年]。
- 土佐亨『『魔風恋風』考—受容・材源・テキストについてのノート—』『文芸と思想』39号(1975):37-56。
- 豊原国周『当世開花別品競』(1886年? 版元三宅半四郎)
- 服部撫松『教育小説 稚児桜』成美堂、1888年[『明治文学全集4』筑摩書房、1969年]。
- 鳩山春子『自叙伝』(非売品)1929年。
- 樋口一葉「十三夜」『文芸倶楽部』12編臨時増刊、博文館、1895年[『樋口一葉全集 第二巻』筑摩書房、1974年]。
- 樋口弘『幕末明治の浮世絵集成』内外経済社、1955年。
- 松平定信『修身録』1782年成立。
- 水原克敏『近代日本教員養成史研究—教育者精神主義の確立過程—』風間書房、1990年。
- 宮城栄昌・大井ミノブ・山田武麿・福地重孝『新稿日本女性史』吉川弘文館、1974年。
- 村上信彦『明治女性史 中』理論社、1974年。
- 山川菊栄『女二代の記』日本評論社、1956年。
- 山田美妙『嫁入り支度に 教師三昧』春陽堂、1890年。
- 『読売新聞』(1902.2.5)
- 「社説」『家庭雑誌』25号(1894.3)